

## 平成 21-23 年度 東北大学東北アジア研究センター外部評価報告書

平成 24 年 11 月 12 日作成

評価委員氏名 井 上 治 印	所属・職	島根県立大学総合政策学部・大学 院北東アジア開発研究科・教授 北東アジア地域研究センター長
〔1〕 理念・目的・目標について		
<p>冷戦構造の負の遺産を抱え込みつつ、領土・資源・人口超大国と小規模国家が併存するという不安定な東北アジア地域が抱える問題は、単なるアジアの一隅を占める地域的なものではなく、その情勢は世界が一定の懸念を持って注視する規模の大きな問題群の所在地域である。そのような東北アジアの地域研究を標榜する研究機関は国内に複数あるが、文化・社会・自然・環境の諸問題を学際的・総合的に研究することを目的とする機関は少ない。人文社会科学分野の研究水準を一層高め、理系諸分野と連携して、総合的な地域研究の確立と推進を主要な目標に据えている点も新奇である。このように、対象地域と研究分野ならびに方法論は、まさに貴センターの際だった特徴となっており、その存在意義であるとも言える。研究成果の社会還元にも高い関心を持っており、開かれた研究機関としての姿を明確にしている。その理念と目的、目標の実現に向かって着実な歩みを続けていることは高い評価に値するものであり、今後のさらなる発展が大いに期待される。</p>		
〔2〕 研究活動について		
<p>理念・目的・目標の実現は研究活動を持って基本となすことは言うまでもない。提供された資料を通覧すると、文系・理系それぞれの研究活動がバランスよく実施されていることがわかる。総合的研究を標榜しながらも、文系・理系内諸分野の連携はさほどに容易なことではなく、並立にさえ苦勞する研究機関がある中、このようにバランスよい研究がおこなわれていることは、所属の研究者間に相互理解・援助の意識が醸成され、研究を推進する体制の確立に成功していることが背景にあると察せられる。個別の研究に目を移すと、東北アジア広域にわたる歴史過程や文化現象と、当該地域に特徴的に存在する自然環境現象・問題の解明に取り組むという一種の安定した研究が積極的に推進されていることがわかる。これは、まさに貴センターの基盤的研究が充実の方向に進み続けていることを示しているものである。また、文系主体の研究課題の中に情報学や環境科学をうまく取り入れている研究課題があることも貴センターのミッションを体現している。さらに、自然災害と地域の関係に着目した研究活動が推進されてきていることは誠に素晴らしい。このような災害文化学とも呼びうる研究は、このたびの震災以前から貴センターの研究者が取り組んできた。今次の悲惨な災害に対し、研究機関としてできうるかけがえのない貢献を果たしていると言え、貴センターの存在価値をいや増しに高めたと言えるだろう。また、研究推進のための国際連携も大変に活発に行われており、東北アジア地域の国際的研究拠点の名に恥じない実績を残していると評価できる。</p>		

〔3〕 教育・社会活動について

元来教育機関ではない研究機関にとって、教育と社会活動への参与は一種の負担増であるように思われるが、教育機関である大学に付設される研究機関が教育活動に積極的に取り組むことは当然のことである。また、貴センターのミッションにも掲げられているように、研究成果の社会還元のため、社会に積極的な働きかけを行わなければならない。これらの点で、貴センターは若手研究者や大学院生の受け入れを積極的に行い、社会貢献活動も活発であると評価できる。教育活動の点で、貴学所属の大学院生の教育に参加するのは当然のこととして、高く評価したいのは、将来を嘱望される若手研究者を、有期も含めて教育研究支援者や専門研究員として多数受け入れ、安定した研究の期間と機会を保証していることである。このような若手研究者支援は、規模の小さな研究機関では実現が難しいため、貴センターの研究者養成における貢献は高い評価に値する。前項でも指摘したが、貴センターの研究の中には人道支援・社会貢献を目指す課題がある点で、大学付置研究機関が負うべき社会貢献の責任を十分に果たしている。その他、年間複数に及ぶ公開講演会を国内のみならず海外でも実施したことは、貴センターが有する海外研究連携ネットワークを有機的に活用した達成した国際的社会活動と位置づけうる成果である。また、学内文系諸部局と連携して開催したリベラルアーツサロンは、参加した一般市民にもわかりやすくなじみやすい内容であったことと推察する。このようなスタンスの公開活動は大変に望ましいことであり、高く評価したい。

〔5〕 総合評価（活動全般、将来性、前回の外部評価での指摘点の達成状況など、ご意見をお書きください。）

活動全般を総括すると、この三年間、貴センターは自らに課したミッションを着実に達成していると評価する。一方、数年間研究モニターを勤めた際に繰り返し指摘した、文系と理系の連携が、個別の共同研究や研究ユニットの活動として完全に実現できていないとした点には、一定の改善が見られるが、やはりいまだに完全に解消されていない印象を持っている。また、共同研究や研究ユニットの中に、社会貢献を意識していないと明言するものが散見されることも問題であることを指摘し続け来たが、それもまだ完全な解消には至っていないようである。組織全体としては申し分のない全面的活動を展開している一方で、貴センターの研究基層部分で、そのミッションが浸透していないように感じられることは残念である。今後もいっそうセンターの基盤から表面に至るまでの整合性ある活動を整えていくことを期待している。冒頭の項目にも記したように、貴センターの対象地域と研究分野ならびに方法論は、日本に数ある地域研究に従事する機関に類を見ない。この点で研究機関としての将来性は保証されているものと考えている。また、今次の震災とその復興において、貴センターの研究が先進的な取り組みを示したことから、その将来性は一層の明るさを持つに至っている。日本の地域研究を先導するセンターとして、誠に貴重な存在であるがゆえに、上に記した問題点がひとつひとつ解決されていくことを節に希望するものである。



# 平成 21-23 年度 東北大学東北アジア研究センター外部評価報告書

2012 年 12 月 28 日作成

<p>評価委員氏名</p> <p>榎並正樹 印</p>	<p>所属・職</p>	<p>名古屋大学</p> <p>年代測定総合研究センター・教授</p>
<p>〔1〕 理念・目的・目標について</p>		
<p>活動報告 2011 に述べてある、「東北アジア地域の文化・社会・自然・環境などの諸問題を学際的・総合的に研究するために、文理連携研究を行う.」とする理念は、高く評価できます。ただ、これを主たる目的であるとし、これに対して、期間を区切り具体的なゴールを設定することが目標と呼ばれるものであるならば、その点の説明がやや不足しているように思われます。</p> <p>HP の沿革に述べられている設立の目的「冷戦構造の崩壊以降の日本が隣接する広域世界のダイナミズムを理解することの重要性に鑑み、・・・・・・その歴史-文化・民族-国家・生態-環境に関わる諸問題を人文社会科学と自然科学との連携によって融合的、総合的に研究を推進する.」と活動報告にある「研究成果の社会的還元及び地域の共生実現に寄与する.」との間に、どのような橋が渡されるのか、期待したい。それは、新たに設立された災害科学国際研究所で具体化されるのであらうと思います。</p>		
<p>〔2〕 研究活動について</p>		
<p>教員お一人お一人の研究には、特筆すべきものも多く、異分野の私が拝見しても、興味を持つテーマも少なくありません。全体として、高く評価できます。では、センターとしての研究はどうでしょう。活動報告 2011 の巻頭言にある「地域研究」は、「地域貢献」を目標のひとつとして含んでいると理解します。これに関連して、組織が個々人の研究や活動の大枠を規定するのか、個々人の成果が全体のベクトルを決めるのか、そのバランスに対する考えには、教員によりかなりの幅があると理解します。プロジェクトユニット研究年度報告・共同研究報告のなかで、この点について特に関連する項目は「東北アジア地域研究」としての位置づけが自覚的か」でしょう。皆さん「はい」と回答されている。センター（組織）にとっては、「東北アジア地域」はおおきな意味を持つことは当然でしょう。しかし、個々の教員の研究・教育にとっては同等の重みを持つものではないと思います。私は、「いいえ、東北アジア地域に関係した研究をおこなっています。しかし、それは〇〇を目標とした、ケース・スタディーです.」という回答が当然あっても良いと思いますが、如何でしょう。</p> <p>「歴史資料保全のための地域連携研究ユニット」や「中国の民族理論とその政策的実践の文化人類学的考察」をはじめとして、活動報告の内容から一步踏み込んで話を聞いてみたい研究が多くあります。一方で、センター設立の経緯からある程度やむを得ないのかもしれませんが、プロジェクトユニットと共同研究のテーマに偏りがあり、それと同時に既</p>		

存の学術領域の縦割りの影響が、まだ色濃いように思えます。2007年からでしょうか、研究部門が「基礎研究」と「プロジェクト研究」となりました。そして、皆さん素晴らしい研究をされていますが、報告書からは特に基礎研究部門の成果があまり見えてきません。これは残念です。連携・融合型の研究は、それぞれの分野が拠って立つ基礎研究があって、はじめて推進されるものだと考えます。基礎研究とプロジェクトのリンクがわかるような活動報告のページがあったらよいと思いました。国際的交流・連携については、多くの研究機関との研究交流が、センターからグループ・個人まで様々なレベルで推進されているという印象を受けます。

もう一点、あまりにも立ち入りすぎ、また些末なことかも知れませんが、「地球化学研究分野」と「リモートセンシング研究ユニット」の名称に、違和感を覚えます。前者は、「地球科学」と比べてあまりにも狭いという印象を受けます。何か特別な理由があるのでしょうか。また、失礼なコメントになるかも知れませんが、私の理解ではリモートセンシングはあくまでも研究手段であり、何を目標としたプロジェクトであるかが名称からは見えてきません。

### 〔3〕教育・社会活動について

大学、そして教員の皆さんの多くが被災されたなか、被災地での活動を開始され、震災の検証と復興のための活動を続けられていること、また学会活動や地域活動を通じて、重要な情報発信を数多くされていることに、敬意を表します。

お送りいただいた資料は、全体として研究にページが割かれており、資料だけからでは残念ながら教育に関する評価を述べることはできません。HPを拝見しますと、特に大学院博士後期課程の受け入れ元部局が、最近一部に偏っているようです。センターとしては、それをどのように評価しておられるのかでしょうか。東北大学の大学院システムを理解していないのですが、何か組織改編があったなどの理由があるのでしょうか。他大学から大学院への入学者数、どんな学部からの進学が多いのか、また学位授与率などの情報があると、教育面でのセンターの特色を読み取ることができるのではないかと思います。今後、ご検討下さい。

### 〔5〕総合評価（活動全般、将来性、前回の外部評価での指摘点の達成状況など、ご意見をお書きください。）

外部評価2008では、高い評価がある一方で、それは個々の教員やグループの活動に依存している場合が多く、例えば文理連携などが機能していないとの指摘もありました。残念ながら、過去3年間の活動報告を拝見しても、その印象は拭い去れません。災害科学国際研究所の設立により、そのコアのひとつが見えたと思います。3.11が地震と津波に始まったことは間違いありませんが、それ以前とその後が災害を大きくしたことも事実だと思います。それを、身を以て体験された方々が中心となり、それぞれの方が拠って立つ分野から、「地域研究」とは、また防災とは何なのかを含め、情報を発信していただきたく存じます。



# 平成 21-23 年度 東北大学東北アジア研究センター外部評価報告書

2013 年 1 月 3 日作成

<p>評価委員氏名</p> <p><b>立 本 成 文</b></p>	<p>所属・職</p>	<p>総合地球環境学研究所・所長</p>
<p>〔1〕 理念・目的・目標について</p> <p>設立趣旨、研究所の目的、目標、そのための研究方針(方法論、成果発表)など、研究戦略については「基本理念」の項に書かれていることで首肯でき、東北アジア地域研究の活性化に大きく寄与しようとしていることはよく分かり、評価できます。ただ、理念がそれを達成するための目的・目標とは違い、「事業・計画などの根底にある考え方」「物事がどうあるべきか」ということの根本的な考え方「何を最高のものとするかについての、根本的な考え方」であるとする、この項では<b>理念</b>が少し汲み取れないのではないかと心配します。東北アジア地域研究のあり方とそれを支える哲学、あるいは東北大学の「理念」の中でのセンターの位置づけといった面が必要なのではないかなという印象をもちます。(理念とは何なのか、どう書けばよいのかということがよく分かっていないので、素朴な疑問です。)学際的・総合的な研究を目指しながら、同時に「人文社会科学の研究水準をより一層高める重要な任務を負う」という自負は、日本の人文学・社会科学の相対的な地盤沈下にてこ入れするという意味でも高く評価できます。</p>		
<p>〔2〕 研究活動について</p> <p>平成 20 年度の組織改編後の 3 年間の研究体制については、うまく機能していると評価できます。個々の教員の研究活動については、詳しい報告が出ていて、それを評価する立場にはないが、組織運営活動に挙げられている数値以外に <b>aggregation</b> としての何らかの取りまとめがあるべきではないでしょうか。</p> <p><b>基盤研究部門の分野別分け方</b>：文系では地域別、理系では複合専門領域別と分かれているのは苦肉の策であることは理解できるが、基盤研究とうたっているところで「地域・国」別の分野があるのは違和感を受けます。将来的には（根本的には）、地域研究カリキュラムの根幹となりうるような「基盤研究分野」を確立していただきたい。</p> <p><b>基盤研究と個人研究との仕分け？（要覧の分野別研究者の紹介の中の「個人研究」）</b></p> <p>プロジェクト研究部門のユニットについては、東北アジア地域研究の枠組みを強めるべきではないでしょうか。東北アジア地域研究そのものではないが、東北アジア地域研究に寄与するプロジェクトについては、基盤研究部門で分野の研究活動として行う方がよいのではないのでしょうか。（予算的な仕組みもあるでしょうが）プロジェクト研究がセンターの目玉であることを強くアピールして、センターだからできるプロジェクトなのだということが分かるようにしていただきたい。ユニット研究年度報告書をはじめ、共同研究報告書の様式に「東北アジア地域研究としての意義」の項があり、その自己申告もなされている。</p>		

しかし、取り組んでいる課題が東北アジア地域（研究）の視座から解決できる問題か否かの検討はなく、機械的に「はい」意義ありと記入している印象を与えるものが多いと見受けられます。

共同研究の代表者も所内の人であるが、**共同研究とプロジェクト研究**と基盤研究とを分ける理由は？

研究センターとしては、基盤研究とプロジェクト研究とのエフォート率をどのように考えておられるのだろうか。

文系振興策の一環としての**コラボレーション・オフィス**設置のセンター内での位置づけ？

### 〔3〕教育・社会活動について

協力講座を沢山の研究科に分散してもち、全学教育にも寄与していることは評価されます。しかし 2008 年の外部評価でも指摘されている「東北アジア地域研究の次世代研究者育成のための一貫した枠組み」づくりについては明らかではありません。独自の次世代研究者養成組織が必ずしも必要だとは思いませんが、東北アジア地域研究の一貫した枠組みを、例えば環境科学研究科のような学際的研究科と協力して**カリキュラム**を作る試みはあっても良いと思います。

社会貢献として「東北アジア」という地域概念の普及と定着を図るとありますが（活動報告 2011:21）、本当の社会的な要請は、なぜ東北アジアなのか、そんなまとまりがあるのか、それはどんな役に立つのかなどということであって、それに関して具体的な知識を提供するのが社会貢献ではないでしょうか。より踏み込んで、シンポジウム・講演会などを通して、相互理解を深め、安全保障上の東北アジア地域の役割を積極的にアピールしていることを強調するのがよいのではないのでしょうか。

上記のようなコメントを踏まえて「21 世紀東北アジア地域像の構築に関する研究ユニット」はセンターらしいプロジェクトとして高く評価したい。もちろん、その成果の方が気にはなりますが。

公募型共同研究の三つの公募分野の設定は極めて適切だと思います？

共同ラボの活用を正面から取り組んだ研究プロジェクトあるいは共同研究があってもよいのではないか。

### 〔5〕総合評価（活動全般、将来性、前回の外部評価での指摘点の達成状況など、ご意見をお書きください。）

機関誌『東北アジア』の定期的刊行は評価できる。発行形態、発行部数、サーキュレーションの実態、カテゴリー別論文数、論文のインパクトなど、他の学術誌との比較のできるデータがある方がよい。

2008 年外部評価で話題になった『講座 東北アジア』のような形の広報活動は必要だと思います。

東日本大震災の後遺症は外部のものには分からない大変な経験だと推察するのみですが、東日本大震災後それまでの努力が実った**災害科学国際研究所**の設立は、今後地域研究が災



害科学への貢献を生かす場を得たということでもあり、ますます分野横断的な連携を強められて人間の役に立つ学問（地域研究）を期待したい。

東北アジアの地域研究をしています、それは大変重要です、というメッセージだけでは不十分で、社会の役に立つ、具体的に研究成果を表に出すことが必要な時代ではないでしょうか。

大学共同利用共同研究拠点としての評価は拠点運営委員会？

資料センター

共同ラボ

学内施設としてのセンターの評価

学内でのインパクト

学術的貢献：特筆できる研究成果

大学教育への貢献

## 東北アジア研究センター（CNEAS）の活動に関する外部評価

### I. 外部評価委員

I-1. 氏名: Сэрээнэн Жаргалан セレーネン・ジャルガラ

I-2. 所属・役職: モンゴル国立科学技術大学地質石油学院鉱物資源学科主任

I-3. 専攻: 鉱物資源鉱山の生成、鉱床生成学

I-4. 評価の公表の可否: 可

### II. 理念・目的・目標について

東北アジア研究センターは、2009～2011 年に東北アジアに関する諸種の研究を行ってきた。あわせて12種類のプロジェクトが活動し、各プロジェクト・ユニットの活動の毎年の報告書には、ユニットの構成、資金、研究の目的の達成度、東北アジアとの関係の有無、学際性、研究成果の国際的レベルに達したか否か、学術的価値、教育面での意義、社会貢献などの多くの指標が示されている。

とくに共同研究の枠で東、北および東北アジアの諸国の大学、研究機関と共同でプロジェクトを実施し、歴史および現代、20 世紀の歴史、社会、文化および自然環境、地球温暖化などの研究、それらに関わる広範な情報を収集し、今後の研究の基盤を創っている。とくに東北アジア諸国の社会・文化・自然環境のデータベースを構築したことは、非常に重要である。

この3年間に同センターが実施したプロジェクトは、所期の目的を良好に達成しており、センターの活動とよく適合している。

### III. 研究活動

東北アジア研究センターは、2009～2011 年に合計12のプロジェクトを実施したが、研究活動は学術研究の主要な分野を含んでいる。これらの研究からみると、東北アジア、北アジア、東アジアの歴史・文化・国際関係などの社会および歴史文化面での研究が幅広く行われている。これにより当該の国々の客観的状況の解明とその評価が行われ、さらには文化・慣習に関わる情報を得たことは、今後新たなプロジェクトの提案・実施に教授・教員・研究員に有益であるほか、研究者間の協力の拡大にも重要な意義があると考えられる。

共同研究では、中国学、西シベリア塩性湖の生態、社会主義システム諸国の科学・教育の実態、ロシア、中国の歴史、北アジアのハーン国諸国の伝統の研究、海岸部の食料生産問題など、歴史・社会・文化・自然環境にわたる広範囲な研究活動を行っている。

科学研究活動で、国外の大学および学術研究機関と協力協定を締結し、協定の枠で国外の研究者を招聘し、また同センターの教授・研究者による国外との共同研究が行われた。研究成果を国際的な学術会議で報告し、学術論文を執筆するほか、東北アジア研究センター自身の出版物で公表している。

#### IV. 教育・社会活動について

東北アジア研究センターにおいて実施されたプロジェクト・ユニットおよび外国との共同研究プロジェクトに、学部および大学院レベルの学生を参加させたことは、日本のみならず、東北アジアの発展途上国の教育・学術分野にあるべき貢献をなしたものと考ええる。とくに東北大学は、規模の大きな大学であり、この大学において行われている多くの分野のさまざまな学術研究を相互に結びつけるという面において、正しい組織化の活動を行ったことは、東北アジア諸国のさまざまなデータベースを構築し、これをいかなる目的のためにも、いつでも利用することができるようにしたことにも示されている。

東北アジア研究センターの活動の一般社会への還元・啓蒙活動を 3 年の間明確な計画のもとで絶えず行い、その度ごとに新しい内容で豊かなものとしてきた。

#### V. 総合評価（活動全般、将来性、前回の外部評価での指摘点の達成状況など）

東北アジア研究センターの活動は、2009～2011 年においてセンターの目的に関わる活動を広範に実施し、東北アジア規模で直面する問題について、共同研究プロジェクトの形で諸種の研究を、国際的なレベルで行ってきた。それゆえ、この報告書は、3 年間良好な活動を行ってきたものと結論づけるものである。

今後の活動と関わって、2009～2011 年に社会・文化・歴史面でのプロジェクト・ユニットおよび外国との共同プロジェクトを行っているので、これらの研究の成果やデータベースを基礎として、自然科学・工学・技術プロジェクトおよび外国との協力を発展させることを目指した活動を行うべきであると考ええる。

## 日本東北大学東北アジア研究センター外部評価報告書

私は 2000 年 5 月に佐藤源之教授の招聘により、はじめて東北大学東北アジア研究センターを訪問し、学術交流を行った。その間、火山地質学研究者谷口宏充教授と知り合い、あわせて中国長白山天池火山に関する中日合同調査研究を実施する協議を行った。同年 10 月、谷口教授と宮本助教らが来華し、正式に吉林大学と合同で長白山火山地質調査を行い、前後約 7 年間を経た。その間私は数回東北アジア研究センターを訪問し、深い学術交流関係を打ち立てた。2003 年 6 月中旬から 10 月中旬、2011 年 3 月から 6 月まで、私は前後二回客員教授として東北アジア研究センターを訪問し、センターの各部門の専門研究者や職員と広く知り合い、またセンターの教職員の会議に参加して、センターの活動状況について一定の理解を得た。とくに昨年 3 月 11 日の東日本大震災に際して、私は中国の地球物理学者として、自ら現場でこの歴史上前例のない大災害を見聞し、自らの目でセンターの教職員を含む仙台の市民が、大難に直面として冷静に対応し、秩序整然として、相互に助け合い、共に困難に立ち向かう様子を目撃し、終生忘れがたい深い印象を受けたのであった。

このたび東北アジア研究センターが私に外部評価海外委員を委任した。一方でセンターが私にこのような名誉と信任を寄せられたことに非常に感謝するとともに、一方では自分がこの職責をよく果たし、センターのさらなる大きな発展のために、非力ながら貢献することを義務と考えている。

私は常々以下のように考えている。この間東北アジア研究センターは、創設時の理念と目標、すなわち東北アジア地域（東アジア、北アジアおよび日本）の文化・社会・自然と環境の諸問題に学術的な総合研究を行うことを目的とし、時に及んで研究成果を社会に還元し、同地域の共同の繁栄発展のために尽力し、同時に人材の要請をも神聖な使命として努力奮闘してきた。かなりの比重で自然科学領域の研究部門を増設し、総合的な地域研究の確立と推進に組織的基礎を打ち立てた。文理が融合して東北アジア地域の地域的問題の研究を行うことは、本センターがその他の大学の東北アジア研究機関と異なる一大特色である。東北アジア地域は非常に多くの問題をかかえ、人文社会科学領域と自然科学研究領域の相結合して行う総合的研究を求めており、そうすることによってはじめて理想的・合理的な研究成果をだすことができる。例えば、過去数年間本研究センターが実施した「中国東北部白頭山 10 世紀巨大噴火およびその歴史効果」の研究は、典型的な文理融合の科学研究課題である。長白山（白頭山）火山の最後の大規模噴火が周辺国家（中国、朝鮮と日本）にもたらした火山災害は巨大なものであったが、これまでその研究のレベルはやや低く、この時の大噴火の時期、規模、噴火の序列などの一連の問題は明確に説明することのできない点が非常に多かった。火山の地質調査、炭化木の年代測定などの自然科学的研究方法と文系的な周辺各国の火山噴火に関する史料中の証拠や民間伝説の収集分析などの総合研究を通じて、いわゆる渤海国の滅亡と長白山火山噴火は関係がないという歴史的事実が明らかになった。このことは、地域の課題に対しては文理融合の総合研究が必要であり、かつ可能であり、また重大で画期的な成果を得ることができるということを物語るものである。

本センターが、引き続き輝かしい文理融合の特色を発揮し、さらにいっそう研究領域を拡大整備し、東北地域の歴史・人文・気候・環境学領域の共同の文系・理系の内容に涉る課題

を研究し、地域の共同の発展に献策を行ってほしい。

本センター各部門のスタッフの真摯で精緻な研究態度と真実を追究する業務態度は、非常に人を感服せしめる。これも私が本センターと多年にわたる共同研究と学術交流を実践する中で深く理解するに至ったものである。このような態度と作風は、学術研究が高いレベルの成果を得るための基盤となるものである。たとえば本センターの人文科学領域の教授たちの中国清朝の宮廷劇や満族の言語文字の研究の深度は、私を非常に驚かせた。もちろんこの領域には私はひとりの無知な門外漢にすぎないが、中国国内の多くの満族の友人も、私と同じようにこの領域の知識は空白であり、ただこのような歴史課題について、本センターがかくも深く、精細な研究成果をもっているということは、ひとつの奇跡と言わざるをえない。ここにはまことにひとつの事実がある。庭には花が咲き、庭の外にも香っている。

3月11日の東日本大地震の中、本センターが所在する建物が大きく破損し、各部門のスタッフは大学の他のキャンパスの臨時のオフィスに分散配置を余儀なくされたが、彼らは不満を言うこともなく、持ち場を堅く守り、積極的に防災・減災の各業務に身を投じ、本務をみごとに全うし、大災害に直面しての一致団結と勇敢に困難に直面する恐れることない精神をよく示した。

本センターのもう一つの特色は、長期間にわたり継続的に東北アジア地域の国々の優秀な専門研究者を招き、来日して短期間の学術交流と研究を行う客員教授制度を維持していることで、現在まで、すでに90名以上の外国の学者を招聘している。

目下、東北アジア地域は世界発展の重要な中心地域の一つであり、この地域の非常に多くの地域的問題の解決は、一国のよく成し遂げるところではない。たとえば、地域あるいは地球規模の環境・気候変動、火山災害を含む地質災害や、人文・歴史的変遷などの問題は、国境を越えた国際的な問題であり、異なる国家の間の国際的協力と地域を越えた協力によってはじめて解決することができる。異なる国家に関わる領域の専門学者の相互訪問と学術交流は、相互理解を増進し、学術研究レベルを高める重要な手段であり、本センターはこの目的にもとづき、長期にわたり人材の招聘計画を維持し、顕著な成果をあげた。今後も引き続きこの制度を維持し、センターを真に東北アジア地域の地域問題研究の国際的中心とするよう努力してほしい。

これを総じて、この数年の東北アジア研究センターは終始その創設の理念を堅持し、センターの全ての教職員が一致団結して、それぞれが担当する研究と教育の任務をみごとに全うし、東北アジア研究センターの国内外での声望をこれまでに高く高めた。

東北大学東北アジア研究センターにさらに光明を増したすばらしい明日を祈念したい。

元中国吉林大学教授： 金 旭

2012年11月30日

(岡洋樹 訳)